

## 巻頭言

# アジアバイオテクノロジーの 中心となる学会に

会長 塩谷 捨明



明けましておめでとうございます。皆様にはよいお年をお迎えのことと存じます。年頭にあたり、いま生物工学会が直面している問題を会員の皆様と共に考えてみたいと思います。

すでに機会あるごとにお話しているのですが、ご存知の方もたくさんいらっしゃると思いますが、問題は平成19年度英文誌発行に関する文科省科研費補助がゼロ査定であったことです。昨年までの補助金は、学会総収入の約1割に当たっており、補助金がなくなれば赤字財政になることは確実で、学会運営にとっては重大な問題です。本年度科研費出版費補助金は、総予算が4割カットと大幅削減されたとはいえ、いろいろ周囲の状況を調べてみると、微減で取まっている学会誌もあり、よく活用されている本学会英文誌がなぜゼロ査定なのか、根拠が明確ではありません。したがって、どのように対処すれば来年度補助金が復活するのか定かではなく、来年度の補助金申請書は、関係者の努力により、一段と迫力あるものにできたと自負しておりますが、来年度初頭の科研費配分決定を不安な気持ちで待つことには変わりはありません。

そこで、執行部としては補助金に依存しなくても良い案を模索検討しています。安易な会費値上げではなく、この試練を変革のチャンスと捉え、時代の変化に対応し、また学会誌のさらなる向上を目指したシステム変更—英文誌はオンライン購読を主とし、冊子体発行を副として有料化する案を現在検討中です。いずれ時期が来ましたら、具体案を公表し皆様のご意見を広くお聞きしたいと思います。それまでもどしどし事務局、執行部までご意見をお寄せ頂ければと思います。またこの問題を広く議論頂ければと思います。

英文誌について、昨年は悲観的な話ばかりではありませんでした。ご承知のように、インパクトファクター（IF）が昨6月のデータによると、1.136と1を超えました。これは、歴代編集長はじめ関係者が、MED-Line掲載、オンライン投稿査読システム、また平常の誌面内容の充実、査読の迅速化などに努めていただいた結果が表れてきたのだと思っております。今後さらにアジアバイオテクノロジーの中心誌の地位を担い続けられるよう努力していきたいと思っております。

会員相互の情報交換誌の役割りが強い和文誌の方も順調に発行されています。特に、好評連載中のバイオメディアが装いを変えて単行本になって発行される日も近く、その日が待たれています。また、本年度生物工学会大会は昨9月25～27日、参加者約1350名を集めて広島大学で行われ、成功裏に終わられたことは記憶に新しいことです。これもひとえに、西尾委員長はじめ西日本支部大会実行委員会のお陰と喜んでおります。

前会長に倣って、私も昨年中に北日本支部、関西支部、中部支部、九州支部、最後に東日本支部とすべての支部の行事に参加させていただきました。どの支部も活発にまたユニークなアイデアで行事を進めておられ、感服いたしました。これら活発な各支部活動を世界に向けて発信する学会でありたいと思います。

情報交換の場の更なる充実を図る、という私が昨年6月に掲げました目標は、資金面を除けば順調に達成されていると思います。今年もこの順調さを保てるよう、また財政面の困難さを乗り越えられるよう、執行部一同努めてゆく所存です。どうぞご支援の程お願い申し上げます。

末筆ながら、2008年が会員の皆様にとって、より一層実り豊かな仕事のできる良い年でありますよう、また平和な一年でありますように祈念致します。